



# 人間模様 I



性同一障害

ユニコ長谷川

この物語は、昭和戦後、ある貧乏のやくざの夫婦から一人の子供が生まれました。

当時は、戦後もあって、金持ちと貧乏人との差が大きく分かれていました。

やくざの父親は男の子を希望し、母親は、父親と同じ道を歩ませたくなくて、女の子を望んでいました。

生まれた子供は、男の子で、父親は、喜び、いつもその赤ん坊をおぶって、浪曲子守唄を歌う喜び様でした。

当時、やくざどうしのいざこざ等もあり、父親は、家を長期空ける事もしばしばで、家計は、母親が、露天で商売しながら、子育てもしていました。

母親は、子供を父親と同じ道を歩ませない為に女の子として育てようと考え、育てはじめました。

近所の人達も、女の子と誰もが思っていました。

でも、戸籍が男性なので、小学校の入学では、男性になり、友達は、「女の子なのに、どうして男の子になってるの？」と言われるようになりました。

いじめにも合うようになり、父親は、何故、自分の子がいじめに合うのか解らず、学校やいじめをした子の家に怒鳴り込む始末でした。

勿論、まわりから、「やくざの子が来た！逃げろ」と叫ばれたりしていました。

でも、女の子として育てられていた時の友達は、かばってくれたり、仲良くしてくれました。

普段は女の子、学校では男の子としての生活をし、勿論、父親の前では、男の子として振舞っていました。

何故、このようにしなくてはならないのか、本人は女の子なのに、どうしてかわからないまま、母親の言うとうりにしていました。

ある日、母親に「まーは、男の子なの、それとも女の子？」と尋ねたら母親は「まーは、男の子がいいの、それとも女の子がいいの？」と聞きました。

「まーは、女の子でしょう。でも、身体は男の子なの？」と応えました。

「お母さんは、お父さんのようになって欲しくなかったから、女の子として育てようとしたの。でも、まーが小学校に入って、それが間違いだったのかも。お母さんを許してね。」

「まーは、お母さんの子供だから、まーの事を思っただけの事だったんでしょう。だから、お母さんは悪くないよ。今は、本当に、まーの事を理解してくれてる友達もいるからね。わかってくれない人は友達でも何でもありませんよ。」

みんな、友達と思って遊んでいても、喧嘩したり、いじめをしたりする子もいるからね。

だから、まーは、本当の友達を選ぶ事が出来て幸せだから。」

「いつまでも、子供だと思っていたけど、自分の意見を持って行動してるのね。お母さん、嬉しい。」

そのような、母と子の会話をしながら、夜が更けていきました。

## 更なるいじめ

---

月日は流れ、まーも中学生。

理解してくれる友達が増える事に胸をふくらませていた。

だが、そんなに甘くはなかった。

外見だけで、人を見て差別も激しかった。

ある日の事、一人の男が、まーに声をかけてきた。

「お前、本当に男か？本当は女なんだろう？仲良くしようぜ」

「まーを理解してくれるなら、嬉しいけど、冷やかしとかはゴメンだよ。」

「質問に答えてないぜ。女なんだろう。」

「気持ち、心は女だけど、身体は男性よ」

「信じられねえよ。制服は男性でも。女にしか見えねえ」

「学校では、そうだけど、家に帰れば、女性になってるの。」

「本当かよ。一度、俺と付き合え」

「うん。いいの」

「俺が言ってるんだぜ」

「放課後、着替えて、学校裏にある公園の炭焼き小屋まで来いよ。待ってるからな」

「うん。わかった」

放課後、まーは、着替えをして、待ち合わせ場所へと向かった。

「お待たせ」

「おー。本当に女みたいだぜ」

「うん」

一人だけと思っていたが、いつの間にか、数人の男性に取り囲まれていて、まーを押しえつけロープで縛りあげました。

「痛い。何するの。やめてよ。ロープを解いてよ」

「本当に、こいつ、男かよ。身体検査しようぜ」

まーは、縛られたまま、下半身をむき出しにされた。

「わー小さい。www」

「本当だ。これじゃあ、女と言ってもわからないのは、当たり前だな」

「これから、どうする？」

「そうだな」

『俺、勃起してきたぜ』

「じゃあ、こいつのお尻におまえのをぶち込んでやれよ」

「やめて。いい加減にしてよ」

「俺達と仲良くしたいんだろう。だったら、大人しくしろ」

「これから、俺達のおもちゃとして調教しようぜ」

まーは、もう、黙って、されるがままでしかなかった。

あたりは、もう、暗くなってきた。

男達は、まーを縛ったまま、立ち去った。

暫くすると、最初に声をかけてきた、あきらが戻ってきた。

あきは、まーのロープを解き

「まーごめん。こんなつもりではなかったんだ。」

「いったい、何かんがえてるの」と、まーは言った。

「だから、謝ってるだよ。悪かったと思ってる」

まーは、あきらの優しさで、許す事にした。

「これからも、俺と仲良くしてくれる？」

「うん。もう、ひどい事しないでね」

「うん。約束する。これから、改めて宜しくな」

「こちらこそ、宜しくね」

「親、心配するから、今日の事は内緒にな」

「うん。わかった。あきら、ちゃんと戻って来て、助けてくれたもんね」

「そう言ってくれると、嬉しいよ。でも、縛られてるまーの姿、魅力的で素敵だったよ。縛られてる時の感じはどうだった。」

「そんな事、聞くの？いきなり縛られた時は嫌だったけど、みんな立ち去ってそのまま放置された時、どうなるのだろうか、いろんな事、頭の中を駆け巡り、だんだん、痺れがきて、もうろうとなってきた、気持ちよくなってきたけど、動けないし、どうする事も出来ないから、泣いていたんだよ。」

「そうなんだ、本当にごめんね。でも、」まーは、Mで、男性を癒す事の出来る女性だよ。これから、まーを女性として接していくからね。」

「うん。嬉しい。いつまでも、仲良く宜しくね。」

「おう！もし、まーに何があっても、俺が助けるからな。」

「うん。約束よ。」

そして、二人は公園を後にした。

## はじめてのデート

---

あきらとまーは、まだ中学生だが、二人は、周りの目も気にせずに、二人一緒だった。

ある日、あきは「二人きりで、話をする時、まーの縛られてる姿を見ながら話をしていたい。癒されるからね。もうすぐ、進路懇談もあるから、いいだろう。」

「うん。あきらと二人きりだけならね。」

まーは、寄り添い甘えたりして、縛られる事に快感さえ覚え、あきを慕うようになった。

そして、二人は、中学の卒業を迎えた。

あきは、自動車の修理工に就職し、まーは、女性として家事手伝いをしながらお母さんの仕事のお手伝いをする事にした。父親は、不本意ながらも、本人の主張に折れて、まーを女性としてみるようになった。

## 悪いやつら

---

ある日、あきは、自動車工場で働いていると、昔の仲間が声をかけてきた。

「おい、あき。まだ、まーと付き合ってるのか？」

「あ、先輩、ご無沙汰してます。でも、もう、俺に構わないで下さいよ。」

「俺達と手を切りたいと言うのか。どう意味を示すかわかっていってるのか？」

あきは、リンチを受け、工場の人達が駆け寄ってきたから、その場は、悪いやつらは、逃げていった。

「あき、大丈夫か？」

「はい。大丈夫です。」

「あき、あのような連中が、会社に顔を出すようでは、みんなにも迷惑をかける事になるから、辞めてもらうしかないからね。気をつけてくれ。」

「はい。わかりました。会社やみんなには、迷惑をかけませんから。」

仕事の帰り、あきは待ち伏せされて、

「おい、あき。俺達と手を切りたかったら、まず、あのまーを俺達の前まで連れて来い。俺達のおもちゃにしてやるから。あきが、まーに何してるかは、俺達は知ってるからな。」

「まーは、関係ない。」

「嫌なら、毎日でも、おまえの会社に押しかけるからな。22時に、いつものところで待ってる。連れて来なければ、わかってるな。」

あきは、無視をした。

あくる日、悪いやつらに会社に来られ、あきは、会社を辞めるはめとなった。

「あき、会社を辞めれてよかったな。また、俺達と仲良く、楽しくやろうぜ。」

「嫌だ！もう、お前達と付き合う気は一切ない。」

「よく、言った。お前のまーがどうなるか、これからが楽しみだぜ。お前が連れて来なくてもな。」

あきは、もう、俺の側から離れないようにする為、まーの家へと向かった。

あきは、まーの家に着いた。

「ごめんください。あきはです。」

「あきは、どうしたの？血相変えて。お父さんも居てるけど、とにかく、あがって。」

「お邪魔します。」

あきは、父親に挨拶をして、今までの経緯を話した。

父親は「あきらか言ったな。気持ちはわかったが、今の君では、まーを守る事は出来ないだろう。まーの事は俺が今でもそうだが、守ってるから、気にしなくてもいいから。」

「でも、俺が巻いた種だから、俺がけじめをとらなければいけないと思っています。」

「その気持ちは、男として、よくわかる。でも、まーは、実際男なんだぜ。いつまでもと、言う訳にはいかないだろう。」

「私は、まーを男としてみていません。女性として接しています。世間は何て言おうが、私は、まーを幸せにします。」

「言ってる意味がわからないが。」

「私とまーを、夫婦として、ご両親に認めてほしいのです。」

「君のご両親は、何ていってるんだ。」

「私には、家族はいません。」

「だから、まーを連れて行こうとしたのか？」

「いえ、まず、お父さんとお母さんに認めてもらいたく、お伺いいたしました。」

「よし、だったら、まず、俺のところに、住み込みで弟子入りしろ。それから、後の事は、考えていこう。」

「有難う御座います。宜しくお願いします。」

「なあ、母さん、俺達に、まーのおかげで、りっぱな息子が出来そうだな。」

「はい、父さん。跡継ぎも出来たようですね。」

「おう。これから、あきはよろしく頼むぜ。」

「はい。お父さん。」

「おい、まだ、お父さんは早くねえかい。」

みんなの笑い声がこだました。

## 性転換手術

---

まーは、両親公認で、女性として、あきらの妻として生きる為、母親に付き添ってもらい性転換手術をする事にした。

その間、あきは、父親に仕事を教わり、露天であるお店を手伝っていた。

後日、まーは、手術を終えて、戻って来た。

店は、母親とまーに任せ、あきは、父親に誘われ、組合に紹介され、挨拶周り等で父親と行動を共にし、後日、あきとまーのお店の場所取りをして、店を持つ事が出来た。

あきとまーは、夫婦同然の生活を始めたが、まーは、戸籍では男性なので、籍は入れられないが、そんな事は気にもしなかった。一生の同棲生活と割り切った。



ある日、二人が店を出していると、また、あの連中がやって来た。

「今晚、近くの境内迄、必ず来い！来なければ、わかってるな！」

そこに、父親が戻って来て、連中は立ち去っていった。

「あいつら、例の連中か。後は俺に任せておけ」

「お父さん、あの連中知ってるのですか？」

「ああ、xx組のチンピラだ。その組長と俺とは兄弟分の仲だから。組長に連絡しておくから、安心して構わないぜ。」

その夜、あきは、父親と組長と共に、境内へと向かった。

すでに、あの連中は待っていた。

「あ！親分どうして、此処に」

「おまえら、この方を俺の兄弟分と知って、ちょっかいを出しているのか。知らないとは、言わせないぜ」

「親分、許して下さい。本当に知らなかったのです。」

「うるせい！俺に断りもなく、この所場で揉め事を起こす奴は許せねえ。今日限り波紋だ。とっと、消え伏せろ！」

その時、子分達が連中を取り囲んだ。

逃げるように、連中は逃げ出した。

親分は「兄貴、迷惑かけてすまねえ。後は、俺に任せてくれるかい」と、言った。

「兄弟、何を言うんだい。こっちの身内の為に手間をかけちまったな。礼をいうぜ」

その後、あの連中は、破門状を各組へと、通報され、大きな顔が出来なくなった。

あきは、父親の力もあり、各親分にも紹介され、露天商としての縞を預かるようになり、若い衆の管理もするようになった。

数年後、父親は、亡くなり、性同一障害者の為に条件を満たした者に戸籍の変更を認められるようになって、ま一は、女性として、正式に認められて、あきらとま一は、結婚し、養子を迎える事も出来た。

母親は、安心したのか、その後、安らかに息をひきとった。